



連載 16

16



## 久宝由実 Yumi Kubo

スイス・ロマンツ管弦楽団管弦楽団  
第一ヴァイオリン奏者

「アモイヤル先生のレッスンは『君が表現したいのは何か』という問いから始まります。それは人生で初めての問いでした」

文=中 東生

Text = Shinobu Naka

今回は7月に日本ツアーを控えているスイス・ロマンツ管弦楽団の第一ヴァイオリン奏者、久宝由実さんに、このオーケストラの本拠地であるジュネーヴ、ヴィクトリアホール横のアートセンター *Grithi* でお話を伺いました。

「**ヴァイオリンとの出会い**

ヴァイオリンと出会ったのは5歳の頃だったので、細かいことまでは覚えていないが、ピアニストの母と、ピアノをすでに習っていた姉がいたため、自分にピアノが回って来る時間が少なかつたという。「ピアノのように大きくななく、どこにでも自分の楽器を持って行ける、という理由から、母を選んでくれたヴァイオリンに出会った時『この音が好き』と感じ、それから自分の楽器が届くまで待ち遠しくて仕方なかつたという記憶は今でも鮮明に残っています」

### ローザンヌ音楽院に留学

高校生の頃から、自分がやっている西洋音楽の発祥の地で学びたいと強く意識し始めた。そして18歳の時、石井志都子先生の勧めで受講した夏期講習で、アモイヤル先生に出会った。「受講生のレヴェルは高く、光るものを持っている人が大勢いました。彼らは欠点をたくさん持ちながら、それ以上に伸ばけた長所を持っていて、2年連続で受講して、アモイヤル先生が教鞭をとるローザンヌ音楽院に留学を決めまし

た」  
桐朋学園のディプロマ・コースを2年で修了し、ローザンヌ音楽院受験の準備を始めようとしていたところ、受験は思っていた6月ではなく、4月23日だという連絡が入る。「必死に準備して受験3日前の4月20日、降り立ったチューリッヒ空港は季節外れの大雪だったのを覚えています」それでも、書類選考に残った受験生14人が争った唯一の席を無事獲得して、晴れて音楽院に入学した。「ローザンヌという街の綺麗さと先生の教え方に感動しました。日本では、伝統文化に顕著のように、上手に『型』にはめるために欠点を消していく傾向があると思うのですが、アモイヤル先生のレッスンは『君が表現したいのは何か』という問いから始まります。それは人生で初めての問いでした。また例えば、1つのフレーズを5通り違った弾き方で演奏させられました。」

コンサートや試験曲は仕上がる寸前まで自由に弾かせておいて、最後にアドヴァイスを受けるので、本番直前に基本的コンセプトを変えたこともありました。でも、ライヴ音楽というものは本来、その日その日の状況で大きく変わるもので、最終的には舞台で創り上げるものだと思います。その学習法は、型にはまらず、その日の音楽を創り上げるよい訓練になりました。また長所短所をたくさん持ち合わせた同級生たちに囲まれて、『自分のよさってどこだろう。』

自分はこの先どう伸びていくのだろう」ということに興味を持ち始めたのもこの時期でした」

### スイスでの音楽活動

4年でローザンヌ音楽院を卒業し、アモイヤル氏が創設したカメラータ・ローザンヌに入団する。「この時期に、世界をツアーで回る機会と、沢山の曲を学ぶ機会が得られ、先生とJ・S・バッハの『2台のヴァイオリンのための協奏曲』ツアーにも出ました」

その後、2007年に初めて受けたオケのオーディションでスイス・ロマンツ管弦楽団の第二ヴァイオリンに入団、09年には第一ヴァイオリンを受け直しに至る。

「スイス・ロマンツ管はオペラも演奏する機会が多いので気に入っています。歌は誰でも持っている楽器で、一番自然に表現できる芸術なので、そのスペシャリストであるオペラ歌手たちと共演することで学ぶことはとても多いです。また、本拠地であるヴィクトリアホールの美しさにも惹かれ、日本からお金を払って見に行くような場所毎日働けると思うと涙が出るほどでした」。そして何よりも、仏語圏のオーケストラ特有の明快な響きが、選択の決め手だったという。

スイス・ロマンツ管には5人の日本人が在籍し、団員たちは仲がよいそうだ。事務局もとてもしつかりしているオケで、保険、税金、社会保

